断章
旭川のアイヌ語地名研究
157

高橋 基

―牛朱別川と、鹿の移動路―

前回は牛朱別川のアイヌ語表記の変遷を見てきた。幕末から明治二十年頃までは、基本的には、「ウシシペッ(usis-pet 蹄・川)」であった。

ところが、明治二十三年に旭川を調査した永田方正が、明治二十四年刊行の『北海道蝦夷語地名解』で、「ウシシュペッ(ushishpet 蹄川―鹿跡多キ川)」と地名解をしたところから、川名の仮名表記は、「ウシシュペッ」、漢字表記は、「牛朱別川」で、その読み方は、「牛朱別川」となった。

写真は、大正七年に札幌の富貴堂書房から発刊された、磯部精一著の『北海道地名解』である。著者の磯部精一は、明治八年に東京で生まれ、明治三十八年に、上川中学校(大正四年から旭川中学校、現・旭川東高等学校に赴任した)アイヌ語研究者で、旭岳の「姿見の池」の命名者でもある。

磯部精一は、牛朱別川の地名解を次のように記した。

牛朱別(ウシシ、ペット)蹄の川の義。ウシシは「蹄」の義にて、牛馬鹿等何れの蹄をも意味するものなるが、此処にては　特に「鹿の蹄」を意味する由なり。昔時此辺には、鹿が群棲したるを以て、今より二十年前には、旭川中学校裏辺にて、鹿の角を拾ひしこと往々ありしと言ふ。

仮に、『北海道地名解』が出版された大正七年から二十年前として、明治三十一年頃は、旭川中学校の敷地から牛朱別川河畔までは、上川農事試作場で、往時は鹿が群棲して、この上川農事試作場で鹿の角を往々拾ったという伝聞が紹介されたのであった。

さて、動物学者の犬飼哲夫は、『北方動物誌』(昭和五十年刊)で、石狩・天塩方面の鹿が、十勝平原に往来する移動ルートを次のように記述している。

十勝平野への移動ルートの一つは、中央山系の一番低い鞍部、すなわち、標高二千メートルのトムラウシ山とオプタテシケ山の間を越えた。大正時代までこの方面の人達はこの鞍部を「シカ越え」と呼んでいたが、今ではその名も忘れられてしまった。

ところが、現場に行ってみると、ハイ松やクマザサの間に、幅一メートルほどコンクリートで固めたようなシカ道が残っている。

これは、実在した鹿道の貴重な記録である。十勝の研究者である吉田巌は、右の鹿道を、石狩と十勝を結ぶアイヌの人達の交通路の一つにあげている。また、狩勝峠も元来は、鹿道のルートが交通路になったものだという。

次に鹿猟の代表的なアイヌ語地名のオヨコウシを紹介する。オ・ヨコ・ウシ・イ(o-yoko-us-i そこで・鹿の群れを待ち伏せして狙い射つ・のが常である・場所)である。

地図は明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』で、オヨクウシは、一八八・六㍍の三角点のある三角山であった(今は土砂採取で消滅)。牛朱別川と三角山の間で、鹿を狙って射たのである。

明治31年　『仮製５万分の１図』

キピリヌプリ(kipir-nupuri 水際からそそり立っている崖・山)は、現在は観光名所になっている「上野ファーム」の山(射的山)、ヌプポコマナイ(←ヌプ・ポク・オマ・ナイ nup-pok-oma-nay 野原・の下・にある・川)は、当麻町から流れる神水川である。

このようなヨコウシ地名は、牛朱別川の他に、石狩川・愛別川・辺別川にもあり、アイヌの人達には重要な鹿猟の場所であったことが分かる。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します